

群 教 セ	G02 - 02
	平15.214集

社会的事象の意味や働きを 追究していく力を育てる指導の工夫

資料から読み取ったことを比べる、
つなげる活動を取り入れて

特別研修員 林 信也 (前橋市立元総社南小学校)

主題設定の理由

社会科においては、網羅的で知識偏重の学習に陥ることのないよう、問題解決的な学習を取り入れるなど、児童の主体的な学習を促すことが一層重視されている。そして、観察・調査・体験・表現などの活動を通して、児童が、自ら社会的事象について考え、その意味や働きを追究していく授業への改善が求められている。

これまでの実践をふり返ってみると、児童の多くは、見学や体験をしたり、資料をもとに調べたり、まとめたことを多様な方法で表したり、伝え合ったりするなどの具体的な活動に楽しさや喜びを見いだしている。しかし、目新しいことを体験できる、パソコンが使える、紙芝居やクイズが友達とできるといった、活動の特性や形態、方法等への楽しみが主になり、なぜ活動するのかという目的や動機はわきに押しやられ、大方は楽しかったで終わってしまいがちである。また、活動を通して社会的な事象の意味や働きを追究していける児童は限られている。

それは、調べる、まとめる過程の学びの在り方と深いかわりがあるのではないかと考えた。追究に意欲を見せながらも、調べ方やまとめ方に支援を要する児童が多い。資料からの読み取りやそれら相互に対する分類・整理が不十分であることに気付かなかったり、気付いていても判然としないまま他の活動へと関心が移ってしまったりする児童の姿が見られる。そのため、追究の方向がそれたり、行き詰まったりしていた。このような児童に対して、追究の視点(問題解決に結びつく着眼点)の見直しや資料活用の技能などの側面から支援を重ねてきた。しかし、調べる、まとめる過程における直接的な手だてについては、これまで十分な工夫や改善を図るまでには至らなかった。

そこで、資料から読み取ったことを調べる過程では、比べることを通して分類・整理していくこと、まとめる過程では、つなげることを通して再構成していくことなどの活動を取り入れていくことが大切であると考えた。

以上のことから、資料から読み取ったことを比べる、つなげる活動を取り入れ、それらに対する確認や見直しの意識を高めるとともに吟味を重ね、価値を見だし、相互の関連に着目しながらそれらの意味するところを統合してとらえていくことにより、社会的事象の意味や働きを追究していく力を育てることができると考え、本主題を設定した。

研究のねらい

社会的事象の意味や働きを追究していく力を育成するために、問題解決的な学習の調べる、まとめる過程において、資料から読み取ったことを比べる、つなげる活動を取り入れたことの有効性を実践を通して明らかにする。

研究の見通し

問題解決的な学習の調べる、まとめる過程に、次のような活動を取り入れれば、社会的事象の意味や働きを追究していく力を育てることができるであろう。

- 1 調べる過程において、追究の視点に即して資料から読み取ったことを比べる活動を取り入れれば、児童は、それらに対する確認や見直しの意識を高めるとともに吟味を重ね、価値を見いだせるだろう。
- 2 まとめる過程において、追究の視点に即して資料から読み取ったことをつなげる活動を取り入れれば、児童は、相互の関連に着目していく必要感を高め、それらの意味するところを統合してとらえられるだろう。

研究の内容と方法

1 研究の内容

(1) 社会的事象の意味や働きを追究していく力とは

社会において認められる様々な事実や現象についての様子や関連などを、追究の視点に即して分類・整理しながら吟味を重ね、その価値を見だし、相互の関連に着目しながらそれらの意味するところを統合してとらえていく力である。

児童が、社会的事象の意味や働きにアプローチしていくためには、まず追究の視点をもつことが必要になってくる。問題を解決するにはどのようなところに着眼すればよいかを自覚することにより、必要な学び方を具体的なイメージとしてもつことができ、そしてそこから追究が始まる。

調べる過程では、追究の視点に即して資料から読み取った事実や気付きを記録・蓄積したり、分類・整理したりする中で、相互に比較していくことが大切になる。比べていくためには、各々の内容を的確につかみ、それらの共通点、相違点や重要性、妥当性などに着目していく必要が生ずる。比べることによって、児童は、読み取ったこと一つ一つに対して確認や見直しの意識を高めながら吟味を重ねていく。そして、それらがもつ価値を見いだしていくようになると思う。

まとめる過程では、調べる過程で見いだした事実や気付きを段階的に関連付け、再構成していくときに、相互の関連に着目することが大切になる。このことは、順序性や関連性を考え、調べてわかったこと、そしてそこから考えられることをまとめる手がかりとなり、調べる過程で見いだした事実や気付きの意味するところを統合してとらえていけるものとする。

これら各過程での学び方は、追究が進むにつれ、フィードバックされ、修正されたり、肉付けされたりしながら、螺旋的に児童の学びを深めていくものととらえる。

(2) 資料から読み取ったことを比べる、つなげる活動とは

追究の視点に即して資料から読み取った問題解決に結びつくと考えられる事実や気付きを記録・蓄積し、追究の視点に即して分類・整理し、それらを段階的に関連付けながら、再構成していく活動である。

資料から読み取ったことには、どのような価値があるのかを考えていくことが、社会的事象の意味を考えることに直結していくと考える。それは、児童の関心や気付きを生かす場となるとともに、追究が十分であればあるほど、目的に応じた方法を選択して的確に表現したり、工夫して効果的に発信したりする活動を促していく基ともなる。

児童は、これら一連の活動を通して、資料から読み取ったことの価値について相互に吟味を重ね、それらの意味するところを統合してとらえていけるものとする。

ア 資料から読み取ったことを比べる活動

調べる過程において、追究の視点に即して資料を読み取り、引き出された事実や気付きを記入

するカード（以後：キャッチカード）に記録することで事実や気づきを蓄積し、それらを再度追究の視点に即しながらグループ化し、タイトルをつけて分類・整理していく活動である(図1)。

児童は、キャッチカード一枚一枚に別々に記録した事実や気づきを蓄積したり、それらを分類・整理してグループ化したり、タイトルをつけたりする中で、それら相互を比較し、重なりを取り除いたり、不必要なものを切り捨てたり、不足しているものを付け加えたりしていく。そこでは、読み取ったことに対する確認や見直しの意識が高まり、その共通点や相違点、重要性や妥当性などについて相互に吟味が重ねられるようになって考えられる。

イ 資料から読み取ったことをつなげる活動

まとめる過程において、調べる過程でグループ化し、タイトルをつけた事実や気づき同士を段階的に関連付け、再構成していく活動である(図2)。

「段階的に関連付け、再構成していく」とは次の順で行っていくことである。

グループごとにつけられたタイトルを再構成していく上での手がかりとし、タイトルの基となった共通項に着目しながら順序性や関連性を考え、グループ内のつながりの再構成を試みていくこと。この段階でつながりの支障となる構成要素やタイトルそのものの妥当性について吟味し直したり、つながりを補う新たな事実や気づきを追加したりするよう働きかけていくこと。

相互のタイトルの順序性からグループ間の事実のつながりを検討し、グループ内の構成同士の関連性を考えながら再構成を試み、「調べてわかったこと」として位置付けていく。

「調べてわかったこと」をもとにグループ間の気づきのつながりを検討し、グループ内の構成同士の関連性を考えながら再構成を試み、「ここから考えられること」として位置付けていく。

これらにより、児童は、資料から読み取ったことの相互の関連に着目し、それらの意味するところを統合してとらえていけるものと考えられる。

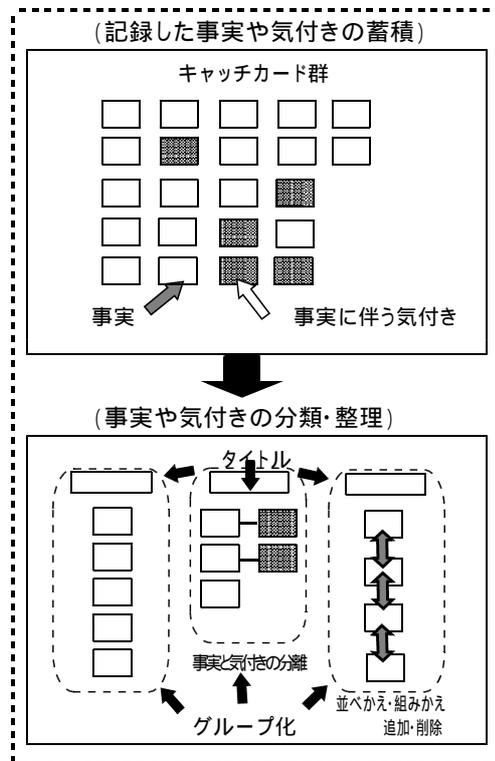


図1 資料から読み取ったことを比べる活動

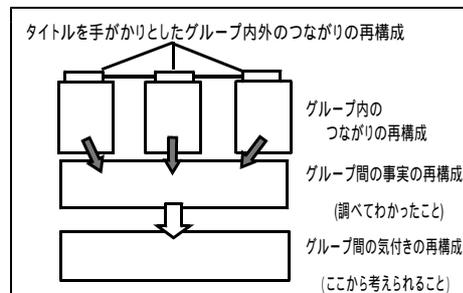


図2 資料から読み取ったことをつなげる活動 (段階的に関連付け再構成)

2 研究の方法

(1) 授業実践計画と検証計画

対象	前橋市立元総社南小学校 5年2組 (26名)	期間(時間)	平成15年10月1日~11月6日(11時間予定)
授業者	林 信也・寺川行厚	単元	「わたしたちの生活と情報(小単元 情報の活用)」
検証計画	検証の視点		検証方法
見通し1	調べる過程において、行楽・レジャー、医療、交通、宅配便、気象の各視点に即して資料から読み取った事実や気づきをキャッチカードに記録・蓄積し、それらをグループ化し、タイトルをつけて分類・整理していく活動を取り入れたことは、児童が、各視点に即した確認や見直しの意識を高めるとともに吟味を重ね、それらがもつ価値を見いだしていくため		キャッチカードの記録・蓄積・分類・整理の状況、ふり返しカード(お見通しチェックカード)の記述を分析する。

	に有効であったか。	
見通し 2	まとめる過程において、調べる過程でグループ化し、タイトルをつけた事実や気付き同士をキャッチカードやワークシートを活用して段階的に関連付け、再構成していく活動を取り入れたことは、児童が、相互の関連に着目していく必要感を高め、調べてわかったこと、ここから考えられることをまとめるために有効であったか。	ワークシート、ふり返しカード（お見通しチェックカード）の記述を分析する。

(2) 抽出児童について

A 児	追究に意欲的であり、視点に即した資料からの読み取りができる。それらを相互に関連付け、意味するところを統合してとらえていく段階に課題がある。分類・整理した事実や気付きの順序性や関連性に着目しながら、再構成が図れるようにしたい。
B 児	問題をつきとめたいという思いはあるが、具体的な活動に際して支援を要することが多い。資料からの読み取りやそれらを分類・整理していく吟味の段階に課題がある。蓄積した事実や気付きの共通点や相違点、重要性や妥当性に着目しながら、確認や見直しを図れるようにしたい。

研究の展開

1 単元の考察と目標、評価規準

単元の考察	<p>本単元は、学習指導要領の第5学年の目標(1)(3)、内容(3)を受けて設定したものである。今日、様々なメディアを介してもたらされる多種多様な情報にどのように応じ、向き合っていくかが、社会生活を営む上で私たちにとても大きな課題となっている。絶えず変化しながら押し寄せる情報に対処していく力が今後ますます重要になっていくことは想像に難くない。その意味で、情報産業と自らの生活とのかかわりを考えていく中で、役立つ情報を見極め、有効に活用していくこととする意識を高めていくことは、[生きる力]をはぐくむことに結びついていくものと考えられる。</p> <p>また、こうした情報に対する見方や考え方は、問題解決的な学びの過程を通して深められ、学びの中に形となって現れてくると考える。児童は、解決のための資料等を吟味しながら、比較する、関連付けるなどして、表現や発信のための活用を図っていく。本単元は、その学習過程において、追究内容を実感したり、身をもって実現したりしながら学びを深めていける教材であり、情報産業に従事する人々の工夫・努力や情報の活用に対する見方や考え方を各自の学びの在り方に位置付けていくことが期待できるものといえる。</p>	
目標	我が国の情報産業（放送局）に従事する人々の工夫や努力、それらの産業と国民生活とのかかわりについて理解し、我が国の情報産業の発展に関心をもつ。	
評価規準	おおむね満足できる	十分満足できる
	<ul style="list-style-type: none"> 我が国の情報産業（放送局）に従事する人々の工夫や努力、それらの産業と国民生活とのかかわりに関心をもち、調べようとする。 【社会的現象への関心・意欲・態度】 我が国の情報産業（放送局）に従事する人々の工夫や努力、それらの産業と国民生活とのかかわりから、国民生活における情報産業の働きや情報の活用のもつ意味を考える。 【社会的な思考・判断】 我が国の情報産業（放送局）に従事する人々の工夫や努力、それらの産業と国民生活とのかかわり及び情報の活用との在り方等について、的確な視点から見学や体験的学習をしたり、基礎的資料を活用したりして調べ、その成果をまとめたり、表現したりする。 【観察・資料活用の技能・表現】 我が国の情報産業（放送局）は、国民生活に大きな影響を及ぼしていることや情報の有効な活用が大切であることを理解する。【社会的現象についての知識・理解】 	<ul style="list-style-type: none"> 我が国の情報産業（放送局）に従事する人々の工夫や努力、それらの産業と国民生活とのかかわりに関心をもち、進んで調べようとする。 【社会的現象への関心・意欲・態度】 我が国の情報産業（放送局）に従事する人々の工夫や努力、それらの産業と国民生活とのかかわりから、国民生活における情報産業の働きや情報の活用のもつ意味をとらえ、それらに対して自らの考えをもつ。 【社会的な思考・判断】 我が国の情報産業（放送局）に従事する人々の工夫や努力、それらの産業と国民生活とのかかわり及び情報の活用との在り方等について、的確な視点から見学や体験的学習をしたり、基礎的資料を効果的に活用したりして調べ、その成果を工夫してまとめたり、目的に応じた方法で表現したりする。【観察・資料活用の技能・表現】 我が国の情報産業（放送局）は、国民生活に大きな影響を及ぼしていることや情報の有効な活用が大切であることを多面的に理解する。【社会的現象についての知識・理解】

2 指導と評価の計画（全11時間予定）

詳細については資料編参照

過程	時間	主な学習活動・内容	形態	評価項目（評価方法）
つかむ	1	放送局の見学や家庭での情報の活用調べから、気付いたことや疑問に思ったことを話し合う。 気付きや疑問をもとに「沖縄への初めての家族旅行」という具体例における場面設定を通して問題と追究の視点をつかむ。	一斉	放送局の見学、情報の活用調べ、具体例に関心をもっている。 （観察・発表）【関・意・態】 それらをもとに問題や追究の視点を考えている。 （発表・お見通しチェックカード）【思・判】
見通す	2	同視点の班に分かれ、情報をどのように活用していったらよいか、行楽・レジャー、医療、交通、宅配便、気象の各視点から追究するための見通しを立てる。	班別 (TT)	自分の視点について予想したり、そこから適切な調べ方を考えたりしている。 （観察・お見通しチェックカード）【思・判】
調べる	3 4	【見通し1】 キャッチカードを活用し、資料から読み取った事実や気付きを記録・蓄積し、それらをグループ化し、タイトルをつけて分類・整理する。 キャッチカード：* 事実と気付きは別欄に記録 * 一枚に一つの事実・気付きを記録 * 個々に見出しを記録	個人 (学習タイプコース別)	資料から読み取った事実や気付きに対して追究の視点に即した確認や見直しを重ね、見出した価値を表現している。 (キャッチカードの記録・蓄積・分類・整理状況、お見通しチェックカード) 【観・技・表】【思・判】
まとめる	5	【見通し2】 グループ化し、タイトルをつけた事実や気付き同士をキャッチカードやワークシートを活用して段階的に関連付け、再構成する。	個人 (TT)	追究の視点に即した相互の関連に着目し、調べてわかったこと、そこから考えられることをまとめている。 (ワークシート、お見通しチェックカード) 【思・判】
ねえり/す/え/あ/う	6 7 8 9	各コースでまとめたことを同視点班で分類・整理したり、関連付けたりして、適した方法で表現・発信する。 * 新聞の特徴を使って表してみよう * 放送局の見学や体験を生かして伝えてみよう など	班別	追究したことを生かしながら話し合っている。 (観察・ワークシート) 【思・判】 目的に合った方法で表現、発信している。 (観察・発表資料) 【観・技・表】

見つける	10	異なる視点から成る班に分散し、班ごとに「沖縄へ初めての家族旅行」に際して、どのようなことに気をつけて情報を活用していったらよいか話し合い、発表をもとに討論する。	班別 一斉	・追究・交流したことをもとに話し合っている。 (観察)【知・理】 ・情報の活用のもつ意味をとらえている。 (発表・お見通しチェックカード)【思・判】
解決する	11	・討論会をもとに、どのように情報と向かい合っていけばよいか話し合い、問題を解決する。	一斉	・情報の活用のもつ意味のとらえを問題と結びつけて考えている。 (発表・お見通しチェックカード)【思・判】

研究の結果と考察

1 調べる過程において、行楽・レジャー、医療、交通、宅配便、気象の各視点に即して資料から読み取った事実や気付きをキャッチカードに記録・蓄積し、それらをグループ化し、タイトルをつけて分類・整理していく活動を取り入れたことは、児童が、各視点に即した確認や見直しの意識を高めるとともに吟味を重ね、それらがもつ価値を見いだしていくために有効であったか

「沖縄への初めての家族旅行」という具体例による場面設定を通して、まず「情報をどのように活用していったらよいか」を行楽・レジャー、医療、交通、宅配便、気象の各視点ごと(表1)に資料から読み取る活動を行った。読み取ったことを記録する段階からキャッチカードの活用を促し、事実と気付きに分けて蓄積していくよう働きかけた。

児童は、教科書などから資料を収集し、キャッチカードに書いていった。第3時の後半には、ほとんどの児童が台紙に複数枚のキャッチカードを貼っていた。

キャッチカードの記録や蓄積状況を見ると、視点によっては実際の情報内容を記録したり、事実と気付きを混同したり、誤認したりする取組も部分的に見られたが、おおむね追究の視点にあったものが積み重ねられていた。その中で、医療、宅配便、天気各視点では、「電子カルテシステムの活用・応用」や「コンピュータネットワークによる宅配情報の管理・活用」、「アメダス・気象衛星・測候所の観測データを活用した天気予報」など「情報を取り扱い仕事をする側」の観点からの読み取りも多く認められた。特に宅配便について追究した3名の児童は、当初「資料が少ない。」としていた。そこで、「荷物の情報をコンピュータに打ち込む」という一枚のキャッチカードへの着目を促したところ、どんなことを、何のためになどの気付きが広がり、資料の見直しを行い、多くのキャッチカードを追加していた。しかし、たくさん手がかりを集めたいとの思いから、記録や蓄積に意欲を見せる児童の多くは、分類・整理の段階で見直せばよいという意識もあり、この時点では積極的な確認や見直しはしていなかった。

事実や気付きの蓄積に区切りがついたら、キャッチカードの分類・整理に入るよう働きかけた。キャッチカードの内容をよく読み、共通するキーワードに着目してグループ化したり、タイトルをつけたりする姿が多く見られた。全体の2割ほどであったが、はじめから順序性や関連性を考えて並べかえていく児童も認められた。また、タイトルをつける段階でキャッチカードを切り捨てたり、書き直したりする児童も出てきた。さらに、タイトルを書き直したり、グループ内でのキャッチカードを分類し直し、新たに別のグループをつくらせたりする取組も見られた。行楽・レジャーに視点をあてた児童の大半は、体験的に情報を検索する中で、情報の得方には多様な手段があることや入手した情報を活用する上で留意しなければならない点についての気付きをもち、それらをグループ化していた。

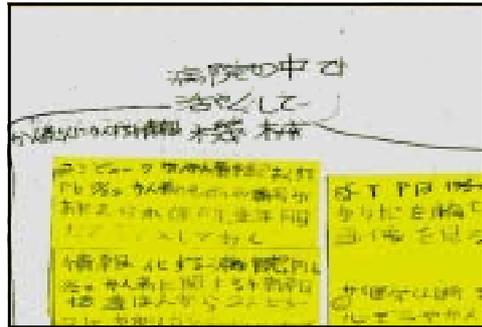
A児は、「安全に楽しく旅行したいと思うから、急に具合が悪くなくても安心できるように」という思いから、医療に視点をあて、主にビデオ資料から読み取っていた。早くから「病院等での医療システムにおける情報活用」に着目し、15枚のキャッチカードを蓄積した。記録を終えるたびに読み返し、蓄積を重ねていく様子が見られた。分類・整理に入っても、しばらく

表1 追究の視点ごとの児童数

行楽・レジャー	9人
医 療	6人
交 通	4人
宅 配 便	3人
気 象	4人

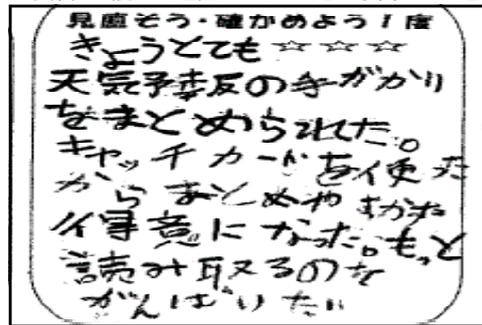
は読み返しに専心する様子が認められた。その結果、「病院で活躍する機械」、「医者役目」、「家庭医から専門医への協力システム」の3グループができた。この時点では、「電子カルテシステム」と「医療機器」を単に「機械」としてくくっていたので、「何の機械か。」と投げかけたところ、グループ内でのキャッチカードの並べかえを重ねていた。最終的にグループ内に「電子カルテシステム」と「医療機器」にかかわるものに分けた二つのキャッチカードの並びをつくった。そして、何度かの修正の末、「病院の中で活躍する患者さんに関する情報機械」というタイトルをつけることができた(資料1)。

資料1 吟味を重ね価値を見いだしたA児



B児は、「台風が直撃することが多い沖縄だから」、気象を視点を教科書とビデオ資料をもとに読み取りを進めた。読み取ることに苦手意識をもっていたが、「このカードは自分に合っている。」とつぶやき、キャッチカードの記録や蓄積に集中していた。その内容は主に天気予報を伝える側に立ったもので、問題解決にかかわって様々な見方ができるという点で価値のある読み取りであった。分類・整理では、キャッチカードの削除や追加等はせず、4グループに分け、「天気予報をどう伝えるか」、「天気予報の時間」、「天気予報をどのように集めるか」、「正確な情報」とおおむね適切なタイトルをつけられた。調べる過程における学習のふり返りの記録には、「とてもよく天気予報の手がかりがまとめられた。キャッチカードを使ったのでまとめやすかった。得意になった。もっと読み取りをがんばりたい」とあった(資料2)。

資料2 調べる過程におけるB児の学習のふり返り



他の児童からは、「何度も読み、意味を理解して分けたからうまくいった。動かし方が自由で一つ一つ書いてあるからわかりやすい」、「キャッチカードを切り取ったり切り捨てたりする時、まだ使えるかどうか考える必要がある」、「タイトルをつけたのでうまく分けられた」、「わかったことと考えたことを分けられてよい」、「キャッチカードごとに一つのことを書くのに戸惑った」、「並べかえや組合せを考えるのが難しかった」等のふり返りが確認できた。

事実や気付きから何をもって一つにするかや並べかえ・組合せに戸惑ったり苦心をしたりしていた児童も見えた。これらは確認や見直しに対する意識が働いている状況であると考えた。そこでキーワードや共通点に着目したり、キャッチカードごとに見出しをつけたりしていくよう働きかけた。また、分類・整理の段階では、キャッチカードの利便性を生かし、読み返しや並べかえを簡単に行い、相互の比較を重ねてグループ化するとともに、多くはなかったが読み取りに対する適切な加除・修正も加えられた。タイトルをつける活動は、グループを構成する事実や気付きについて吟味を重ね、見いだした価値を表現することにつながったと考える。

以上のことから、調べる過程において、追究の各視点に即して資料から読み取った事実や気付きをキャッチカードに記録・蓄積し、それらをグループ化し、タイトルをつけて分類・整理していく活動を取り入れたことは、児童が、各視点に即した確認や見直しの意識を高めるとともに吟味を重ね、それらがもつ価値を見いだしていくために有効であったと考える。

2 まとめる過程において、調べる過程でグループ化し、タイトルをつけた事実や気付き同士をキャッ

チカードやワークシートを活用して段階的に関連付け、再構成していく活動を取り入れたことは、児童が、相互の関連に着目していく必要感を高め、調べてわかったこと、ここから考えられることをまとめるために有効であったか

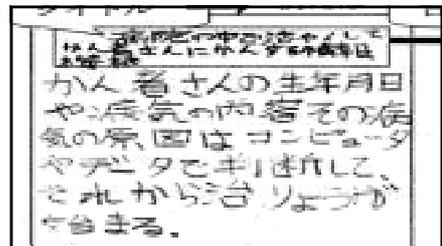
グループ化してタイトルをつけたキャッチカードをもとに、ワークシートを活用しながら読み取った事実や気づきを、まずグループ内で、次にグループ間でつなげ、調べてわかったことやここから考えられることをまとめていくよう働きかけた。

まず、グループ内の再構成を考えるに当たり、児童の大半が、タイトルと個々のキャッチカードを見返しながら、試行錯誤を重ねていった。この操作を行う中で、キャッチカード同士を併せたり、不要なキャッチカードや記述を取り除いたり、修正したりしていた。「交通」に視点をあてた児童の一人は、「渋滞時の車内での過ごし方にかかわること」を記録していたが、この段階で問題とのかかわりが薄いことに気付くことができた。また、分類・整理の段階で、すでに順序性や関連性を考慮に入れてグループ化に取り組んだ児童も見られた。それらの取組のうち4例は、「お客への工夫・情報で成り立っている宅配便(わかったこと)」、「宅配便を頼む前に(気付いたこと)」のように、事実と気づきを分離して考えられていた。

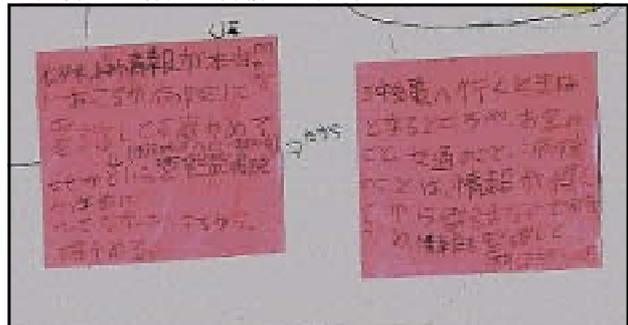
グループ間の事実や気づきの再構成では、タイトルに順序性を見いだし、それをより所として再構成を試みる児童が多く見られた。その中には、グループ内の再構成が部分的に欠落し生かしきれなかったり、事実の再構成に気づきが一部混入したりするものも見られた。しかし、「宅配便の万全の情報管理システムの仕組み」から、「依頼者の安心感」に結びつけたり、「交通情報には多様な得方がある」ことから「目的にあった方法で情報を手に入れ、大切なことを見分けていく」ことをとらえたりするなど、気づきの再構成の多くに、複数から成る事実の再構成に基づく考えを見いだしせた。

A児は、グループごとに並べかえたキャッチカードを再び並べ直したり、それらを通して読み返したりして、グループ内の再構成を一つ一つ検討していた。例えば、「病院の中で活躍する患者さんに関する情報機械」では、10枚を超えるキャッチカードがあったが、それらを「病気の内容・原因」、「コンピュータのデータ」などの言葉に置きかえ、端的に再構成することができた(資料3)。また、この段階ですでにグループ間の順序性や関連性を考えながらつなげていることが見取れた。A児のキャッチカードは事実の記録・蓄積にとどまっていたため、気づきの追加を促したところ、教科書から「情報を見分ける」、「情報の質」というキーワードを見いだした。そして、「医療システム」について調べた事実に対して、「でも情報を利用する時、質を見分けることが大切」、「だから情報を確かめ、整理して活用した方がよいと思う」と気づきの再構成に加味できていた(資料4)。学習のふり返りを促したところ、「次の時間からも情報を大切に、いろいろな大切ところを抜かさないで見直していきたい」と書いていた。

資料3 グループ内の事実を端的に再構成した



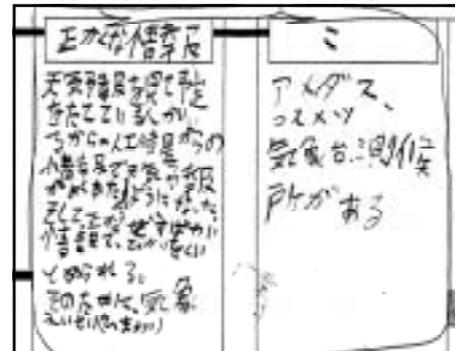
資料4 気づきを再構成に加味したA児



B児は、キャッチカードの並べかえの操作をすることはほとんどなく、キャッチカードを数度にわたって読み返しながら、ワークシートの枠内に直接書き込みを進めていった。四つのグ

ループの再構成のうち三つについては、記録をそのまま写し取っていた。「正確な情報」については、文章表現の適切さやつながり方には不十分さが残るものの、つなぐ順序を変えたり、「そして」、「そのために」などの接続語を用いたりして、「天気予報を見て予定を立てている人がいるから」という理由をはっきり書くことができた(資料5)。これらの再構成は、キャッチカードを分けた台紙上の順序と変わりがなかった。そこで、「グループ同士のつながりはこのままでいいのよ。」と問いかけたところ、「一つ一つのグループのまとめを読んでから。」という答えが返ってきた。グループ間では、「天気予報には様々な伝え方の工夫があること」「天気を見て予定を立てる人がいること」「だから(このような工夫をされて伝わる)天気予報には様々な手段があること」「そして正確な情報を伝えるために気象衛星などがある」とつなげ、天気予報について発信者と受信者の両面から見た事実を再構成していた。また、この事実の再構成をもとに、「沖縄に行くときはテレビ、新聞、ラジオなどをよく見て台風の天気予報を見逃さないようにしたい」と思いを書いていた。

資料5 関連性を考えグループ内を再構成したB児



事実や気付きを段階的に関連付け、再構成していく活動において、個人差はあるけれども、順序性や関連性を考え、必要な接続語や指示語を用いるなどして複数の事実や気付きをつなげ、その意味することを見いだそうとする取組が見られた。そして、児童の多くが、再構成された事実やそれらに基づく気付きから、「正確性や確実性、適時性、多様性」といった情報を活用する上で見落としてはならない点をとらえることができた。また少数ではあるが、それらをさらに関連付け、「情報の質を見極めること」としてとらえ、考えを述べることでできた児童も見られた(表2)。

表2 事実や気付きの再構成からとらえたこと

情報をどのように活用していけばよいか	人数(のべ)
正確・確実であるか確認する必要がある	16人
情報によって多様な得方や使い方があり	4人
早く得られる情報にも意味がある	3人
情報の質を見極めることが必要である	7人
(目的に合わせて、応じて)	(2人)
(得た情報を整理して活用する)	(1人)

注:()は 太枠内の人数中の内訳

このことは、並べかえや加除修正が容易なキャッチカードの効果的な活用を促すとともに、段階的にワークシートの活用を図ることによって、相互の関連に着目していく必要感を高め、くり返し吟味が重ねられ、それらの意味することを統合して考えることができたためではないかと考える。

以上のことから、まとめる過程において、調べる過程でグループ化し、タイトルをつけた事実や気付き同士をキャッチカードやワークシートを活用して段階的に関連付け、再構成していく活動を取り入れたことは、児童が、相互の関連に着目していく必要感を高め、調べてわかったこと、ここから考えられることをまとめるために有効であったと考える。

研究のまとめと今後の課題

比べる、つなげる活動を取り入れたことにより、児童が資料から読み取ったことを追究の視点から吟味しようとする意識が高まり、それが、相互の関連に着目したり、それらの意味することを統合してとらえていく際にもくり返し行われるようになった。

キャッチカードの活用は、活動を支える上で効果的であったが、つなげる活動をより効率的で確実なものとするために、ワークシートの形式や投入場面を工夫していく必要がある。

